

## 21世紀は絶滅動物の復活の世紀に

佐藤 勝 紀  
岡山実験動物研究会長

会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。常日頃、本研究会をご指導、ご支援いただきまして心から厚くお礼を申し上げます。

本研究会の名誉会員である猪 貴義先生が本年5月22日に徳島で開催された第47回日本実験動物学会総会で日本実験動物学会功労賞を受賞されました。先生のこれまでの長年にわたる数々のご功績が評価されたもので、心よりお祝い申し上げます。

昨年11月24日に開催された第38回研究会で林原自然科学博物館の鈴木 茂先生が林原自然科学博物館とモンゴル古生物学センターとの間で進められている壮大な共同研究の研究成果をお話しされたが、カラー色で鮮明に描かれた絶滅前の恐竜がモンゴルの地を闊歩する復元図は大変印象的であった。

今年7月7日付の毎日新聞に、林原自然科学博物館とモンゴル古生物学センターの共同調査隊は約7000万年前（白亜紀末期）の砂層から鳥類だけの特徴とされてきた「尾端骨」のある新種の恐竜化石を発見し、地名にちなんで「ノミンギア」と命名したことが報じられた。尾端骨は尾の先端部の複数の骨が結合したもので、ここに尾羽がつき、鳥の証拠とされる。この尾端骨が恐竜の化石から発見されたのは世界で初めてで、恐竜と鳥の進化の関係を知る重要な発見と見られている。一方、今年の6月23日発行の米科学誌「サイエンス」に米国などの古生物学研究グループは30年ほど前に中央アジアの2億2000年以上前の地層から発見された爬虫類の化石を調べた結果、羽を持っていることを発見した。羽を持つ脊椎動物の出現はジュラ紀後期の「始祖鳥」などより数千万年もさかのぼり、この爬虫類が鳥の祖先となった可能性もあることを示唆した。この爬虫類は「ロンギスクアマ」といい、体長約25cmのトカゲのような生き物で木々の間を滑空しながら生活していたと考えられている。今回のこれらの発見はいずれも鳥の進化の謎を解く上で大変貴重な資料とみられている。

米商務省「特別調査報告書」－西暦2000年の地球（1980年発行）によると、生物絶滅のスピードは17～19世紀末までは4年間に1種、20世紀には1年間に1種、2000年（20年間）までには1時間で8種と年々早まり、今世紀まで145万3000種（最大予測値）の生物が絶滅する可能性があることを指摘した。我が国

でも環境庁の報告によると、絶滅危惧種に指定されている動物は245種にも上がっているという。絶滅や絶滅の危惧をもたらす大きな要因は生息環境の悪化、乱獲、侵入種の影響などが挙げられる。絶滅動物種数は人口増加と連動しており、動物の絶滅の行方と人間の将来は深い相関をもつことが推定されている。

近年、最先端の科学技術を利用した絶滅動物、絶滅危惧動物の復活作戦が展開されている。その代表格が1万年前に絶滅したマンモスである。シベリアの永久凍土に埋もれているマンモスの精液、精子あるいは体細胞を取り出し、象を受け皿にして復活させようとする試みである。これまでの研究で、マンモスの体細胞クローンを利用することは現時点では不可能に近いこと、マンモスはアジア象よりもアフリカ象と近縁であることが明らかになった。マンモス復活のために現在残された唯一の方法は、マンモスの精子と象の卵子を体外受精させ、受精卵移植などによって得られる雑種雌にマンモスの精子を用いて果進交配することである。そのためにも、雌のみを生ませる技術が不可欠となる。

上記のマンモス以外にも、絶滅動物、絶滅危惧動物の復活や保護作戦が世界各地で展開されている。今年に入って、NHKの「生きもの－地球紀行」で絶滅した野生動物をよみがえらせる復活作戦が報道された。米国ロッキー山脈の狼、チェコ・シュマバ国立公園のヨーロッパオオヤマネコ、ポーランド・ビェブシャ湿地帯のヨーロッパビーバー、佐渡のトキ、兵庫県豊岡市のコウノトリの事例が取り上げられた。これらの復活作戦には長い時間と途切れることのない取り組みが不可欠であること、野生動物の生息環境の拡大、保護と生態系のバランス、人との共生を図っていくことの重要性が指摘された。最近、絶滅の危機に瀕しているパンダの実態調査に全地球測位システム（GPS）などのハイテク機器が導入され、生息環境の保護や人工授精、クローン技術を使った人工繁殖にも成功し、着実に成果を上げている。

来る21世紀は、絶滅動物、絶滅危惧動物を最先端の技術を駆使して蘇らせ、復活させる世紀と言われており、生態系が十分配慮され、復活した動物と人との共生、共栄が図れる世紀にと願っている。